

地域学を創る 4

柳原 邦光

On Creating Regional Sciences, Part IV

YANAGIHARA Kunimitsu

地域学論集（鳥取大学地域学部紀要） 第16巻 第2号 抜刷

REGIONAL STUDIES (TOTTORI UNIVERSITY JOURNAL OF THE FACULTY OF REGIONAL SCIENCES) Vol.16 / No.2

令和2年 1月 31日発行 January 31, 2020

地域学を創る 4

柳原邦光*

On Creating Regional Sciences, Part IV

YANAGIHARA Kunimitsu*

キーワード：地域学、自然、いのち、死、聖なるもの、関係性、個人化、実践

Key Words: Regional Sciences, nature, life, death, the sacred, relationship, individualization, practice

I. はじめに

初めて「地域学」の論考を書いたのは2007年のことである。「地域学総説」1年目の授業記録を『『地域学総説』の挑戦』として学部紀要の『地域学論集』第3巻第3号に掲載した。それ以来、地域学部での授業や地域学研究会大会などをベースにしてたくさんの原稿を書いてきたが、それもようやく終わろうとしている。学部の必修科目（「地域学入門」「地域学総説」）や教員免許資格更新授業（「地域学入門」）で語るのも今年度で最後にした。すでに終了しているので、人前で「地域学」を語ることはもはやない。

「地域学総説」では、最終講義として「地域学」をどのように創ってきたのか、筆者にとって「地域学を創る」とはどのような意味をもっていたのかを語った。内容の多くはすでに語ってきたことであるし、論考として発表してもいる。新しい点といえば、個人的な事情を含めて、筆者にとって歴史研究と地域学研究とがどのような関係にあるのかを詳しく語ったことである。それだけに本稿を執筆するにはためらいがあった。それでも地域系の学部や学科が増えている今日、地域に関わったり、授業を担当したりして苦労されている方もあるはずである。研鑽を積んできた専門領域を超えるのはなかなか難しい。たとえ一教員の経験であっても、参考になるかもしれない、そう思って、地域学部の状況について少し情報を加えて公表することにした。

具体的には、最初に「地域学の確立」に向けた鳥取大学地域学部の教育研究体制の構築過程を振り返る。続いて最終講義「私の『地域学』の作り方」の原稿をそのまま記すことにした。最後に、現在の地域学部の「地域学」の状況と今後について言及して終わりとしたい。

II. 地域学部の教育研究体制の構築

2004年に創設された地域学部が目指してきたのは、新しい教育研究領域として「地域学」を確立し普及することである。これはとてつもない大仕事で、一朝一夕でできることではない。実際には、教員が真っ先に直面したのは教育面である。学部必修科目の「地域学入門」（1年生前期、2004年度開始）と「地域学総説」（3年生前期、2006年度開始）を内実のともなった授業にしなければならない。研究面では、「地域学」を確立する体制づくりが急務だった。どちらも容易なことではなく、結果的に必修科目の授業を企画運営しながら、徐々に研究体制を整え、「地域学」（以下、地域学と表記）の中身をつくっていった。ここではそのあらましを紹介したい。

筆者がこのプロセスに参加したのは2006年度「地域学総説」（1年目）からである。「地域学入門」の場合は2007年度（4年目）からで、2007年度はどちらの授業でも進行役を務めることになった。開講曜日が前期の同じ水曜日の2時間目と5時間目だったため、進行役は極めてハードな仕事だった。1週間の多くの時間を2つの授業準備に充てていたように思う。幸いにも地域学を必要だと考える教員が「地域学を創る」ために力を合わせることができた。たとえば、2008年に教員6名で『『地域学』を創る—鳥取大学地域学部の試み—』（『地域学論集』第4巻第3号参照）を執筆した。筆者自身は「地域学総説の挑戦」と「地域学を創る」をシリーズ化して、授業の成果を論文のようなものにまとめた。2011年にミネルヴァ書房から出版した『地域学入門—〈つながり〉をとりもどす』は、このような教員たちの継続的な努力の賜物である。

地域学部は今年で16年目を迎えた。この間の大き

*鳥取大学地域学部 国際地域文化コース

な変化は2017年度に改組したことである。「地域政策」「地域文化」「地域教育」「地域環境」の4学科から、1学科3コース、すなわち、「地域学科」で「地域創造コース」「国際地域文化コース」「人間形成コース」となったのである。自然科学系教員の多くが農学部に移ったことは残念だったが、協力を得て新学部に必要な授業をカリキュラムにしっかり組み込むことができた。学部の根幹自体は変わっていない。

現カリキュラムの全体像を説明すると、1年生から4年生まで主要科目を積み上げて、各コースの専門科目で「専門性の深化」を目指している。その一方で、「地域フィールド演習」(1年次選択)、「地域調査プロジェクト」(2年次必修、通年)などの実践科目を通して「実践力の進化」を図っている。さらに専門科目と実践科目の間に「地域学入門」と「地域学総説」などの「地域学系科目」を配して、専門科目と実践科目をつなぐとともに、3コースをつなぐ役割も担っている。専門と実践の間を往復して、「地域学」で統合を図りつつ、「地域を見る広い視野と専門の方法論、実践力」を兼ね備えた「地域の持続可能な発展を担うことのできるキーパーソン」を育成しようというのである。正確に言えば、将来「キーパーソン」になる可能性をもった人材を育てることを目指している(地域学部パンフレットを参照)。

研究推進体制は段階的に整えた。最も重要なのは、2004年の学部創設と同時に、学部教員で構成される「地域学研究会」を立ち上げたことである。その目的は「学問としての地域学の確立と普及」(地域学部ホームページ参照)である。研究会のほかに「幹事会」をつくり、学部紀要を『地域学論集』に改めた。幹事会は月1回の開催で、研究会やプロジェクトなどの企画・調整を行うことにした。しかしながら、スタート時点では、「地域学入門」と「地域学総説」の企画・運営、『地域学論集』の編集・発行だけで精一杯であった。地域学部の掲げた目的は実に壮大なものだが、実際のところは、学部必修科目をしっかりとやれるかどうかが一番の課題だったのである。

次の節目は2010年度である。学部創設7年目に「地域学研究会大会」を開催することができた。大会では「地域学を創る」ために必要なテーマを設定して、基調講演と分科会で議論を深め、成果を『地域学論集』で発表するようにした。次に岐阜大学地域科学部と鳥取大学地域学部で提案して、「国立大学地域学系大学・学部等連携協議会」を設立した。年1回の持ち回り開催で、協議と情報交換の他にテーマを設定して、シンポジウムで報告と議論をするこ

とにしたのである。第1回は鳥取大学で地域学研究会大会と同じ時に開催した。現在、参加大学は10校である。2012年度には「地域連携研究員制度」をつくり、地域の有識者・実践者と共同研究を始めた。その成果は地域学研究会大会で報告している。

「地域学を創る」うえで最も生産的な場となったのは、「地域学入門」(1年)と「地域学総説」(3年)である。ともに学部にとって最も重要な必修科目であり、ただのオムニバスの授業にならないように、教員は最初から必死に取り組んだ。特に「地域学総説」は難しい課題を抱えていた。「総説」と銘打っている以上、「入門」を越えて地域学を理論的・体系的に提示しなければならないからである。そのために授業計画を念入りに検討して作成するだけでなく、授業が始まれば、毎回、授業終了後すぐに反省会を開いた。200名近い学生(新地域学部では約170名)のコメントシートを10名くらいの教員がすべて読んで、次の授業や翌年度の授業計画に活かした。このようなプロセスを繰り返しつつ地域学が次第に形を成してきたのである。

2つの授業に共通する特徴は学外講師の招聘である。たとえば、2018年度の場合、2科目合わせて15名をお招きした。なぜ招聘するかといえば、地域の現場で立ち上がってくる「生きた知」を地域学に組み込みたいからである。「今の時代に大事なことは何か、常に見つめ続けるべきもの、確かな判断の根拠とすべきものは何か」を確認するのである。「地域の知」「生活の知」に学び、「学術的な知」との往復運動を通して、時代の切実な要請に応える地域学を創ろうとしてきたのである。

このようなねらいがあるので、学外講師は慎重に選んだ。教員の誰かが講演を聴くか、著書を読んで、是非聴きたい、他の教員や学生にも聴いてほしいと思う方に講師をお願いしたのである。また、できるだけ多くの「生きた知」を吸収するのが目的であるから、どんなにいいお話でも、原則2回までにして、様々な経験をされている方々に来ていただくようにした。学生のための授業ではあるが、教員もまた学ばなければならない。「地域学」は「学術の知」だけでできるものではないからである。

このことに気づいたのは2006年度に「地域学総説」を学部教員だけで行った結果である。「地域学を創る」という意識も「地域学総説」を1年やってみて自ずと芽生えた。全体構想がなければオムニバスの授業にしっかりと文脈を与えることはできない。そのことを痛感したからである(柳原邦光、2007、『「地域学総説」の挑戦』、『地域学論集』第3巻第3

号参照)。地域学部が「地域学の確立」を目的としていたからというわけではない(実は知らなかった)。それで2年目から学外講師に来ていただいたのである。2007年度は2科目合計で10名、そのうち8名の方の講演を「地域を創る」と題して公開講演とした。地域学部で少しずつ形を成していく地域学の成果を住民に還元し、意見交換をしようという意識も同時に生まれたのである(この形は現在まで続いている)。学外講師の招聘は地域学部の教育研究にとって「生命線」なのである。

もう一つ重要なことがある。授業から得たことをしっかりと記録し、蓄積し、積み上げていくこと、その過程で見えてきたものを吸収して、言語化することである。実際、筆者は「入門」と「総説」、地域学研究会大会などで得た知見や「気づき」を丁寧に記録してきた。また、「松場登美さんの仕事に学ぶ」「いのちをいただき、いのちを生かす」「地域学の現在」という論考のように、特に重要と思われる実践者や学会活動については特別に取り上げて論文化し、「地域学」に組み込んできた。そしてその成果を「入門」と「総説」で語るといふ具合に好循環をつくることができた。

論考や講義原稿を執筆する際には、横文字もカタカナも概念もできるだけ使わないで、誰にもわかるように表現するようこころがけた。言葉が読み手の理解を阻む高い壁になってはならないし、研究者、学生、住民を問わず、地域や生活をよくしたいと思っているすべての人たちに届けたいからでもある。この姿勢は、後述するように筆者の尊敬する作家が戦後まもなく発表した「死者との対話」という短編小説から学んだことである。また、学外講師の語りから吸収したことでもある。

このほかに、筆者の見解と表現がどのように受け止められるか、教員免許資格更新授業の「地域学入門」で試してきた。もちろん「地域学の普及」のためでもある。学校の先生方に話すのは結構楽しいことだった。学生よりも社会経験が豊富であるし、80分×4回の授業なので、事例も含めて地域学について十分に語ることができた。当然のことながら、準備には時間をかけて、必ず講義原稿を作成した。授業での意見交換を通して得た気づきも少なくない。勇気をいただくこともあれば、時に厳しい言葉に反省と再考を促された。素晴らしい経験だった。もちろん、たくさんの指摘は学部の授業や論考に組み込んだ。実際の授業内容については、2017年度授業の講義原稿を『地域学論集』で発表した(柳原邦光「地域学入門」第14巻第2号、1-50頁)ので、興味の

ある方はご覧いただきたい。『地域学論集』に掲載された論考は、インターネットで検索すれば誰でも読むことができる。

以上のようにして地域学部は教育研究体制を整え、格闘を続けて地域学を創ってきたのである。

次は、2019年4月10日に「地域学総説A:想像力としての地域学」で行った筆者の地域学総説での最終講義「私の地域学のつくり方」の原稿である。

Ⅲ. 私の地域学のつくり方

はじめに

こんにちは。国際地域文化コースの柳原邦光です。少しだけ自己紹介しますと、私の専門は歴史学で、フランス革命や「ライシテ」と呼ばれるフランス型の政教分離について研究しています。「地域学総説」ではずいぶんたくさん講義をしましたが、歴史学で講義したのは1回だけです。2011年度に「歴史的に考えるということ」というタイトルで話しました。ほかはすべて「地域学」でした。

「総説」は今年で14年目を迎えました。昨年度までは全15回でしたが、今年度からは選択の幅を広げるために「A」「B」「C」の3つに分けました。必修科目は「A」だけで、授業回数は8回です。「総説A」の目的は、「地域学」をしっかりと理解すること、今年度の場合は、とくに「地域学のフィロソフィ」を学ぶことです。ということで、私の役割は「地域学とそのフィロソフィ」を簡潔に紹介することです。

他にもう1つ課題があります。「私の地域学のつくり方」という講義タイトルが示しているように、「私自身がどのようにして地域学を創ってきたのか」を紹介することです。皆さんがみなさんなりの地域学を創るときに少しでも参考になればと思って設定しました。

「地域学を創る」ことに関して、最初に基本的なことを確認しておきます。先ほど私の専門は歴史学だといいました。歴史学は「過去」を研究対象にしています。「現在」の問題意識をもって過去と向き合い、問いを立て、対話して、過去の意味を考えます。地域学の場合はどうかといいますと、過去はもちろん重要です。しかし、重点は「今」と「これから」、すなわち、「現在」と「未来」にあります。地域学は未だ実現されていない未来への志向性をもっているのです。それは「実際に行動すること」「実践」と深く結びついています。ですから、歴史学に留まるかぎり、私が地域学でできることは多くありません。「実践」はとても無理です。「地域学のフィロソフィ」

ならなんとかかなるかもしれませんが、歴史学の枠を超える努力が必要です。

要するに、本来的に困難は大きいのです。それでも私は歴史学の枠を少しずつ超えて、他の学問領域から学び吸収して、地域学を書いてきました。もちろん、自分だけでできることではありませんので、「地域学入門」と「地域学総説」をフルに活用しました。というのは、耳学問ではありますが、授業を通して他の学問領域の教員から直接「学術的な知」を吸収できるからです。それだけでなく、実践者から地域や生活のなかにある「地域の知」「生活の知」「実践の知」を学ぶことができるからです。

この点についてもう少し説明しましょう。「入門」でも「総説」でも、13年間にたくさんの学外講師をお招きしました。ほとんどが「実践者」です。県内に限らず、北海道から九州まで様々なところから来ていただきました。もちろん、お金がかなりかかります。それでも招聘を続けたのは、学外講師のお話には傾聴すべき価値があるからです。

つまり、こういうことです。地域の現場で立ち上がってくる「生きた知」を地域学に組み込みたいのです。それを通して「私たちが生きている、この時代、この社会において、大事なことは何か、常に見つめ続けるべきもの、判断の確かな根拠とすべきものは何か」を確認したいのです。「地域の知」「生活の知」「実践の知」に学び、「学術的な知」との往復運動を通して、時代の切実な要請に応える地域学を創りたいからです。

私は歴史学だけで考えてきたわけでも、「学術的な知」だけで何とかなると思ってきたわけでもありません。生活のなかにあるものと接続して初めて地域学は可能になります。

このようにして様々な知を集め、吸収し、組み合わせ、鳥取大学地域学部の構想する地域学として公表したのが、教員11名で共同執筆した『地域学入門—〈つながり〉をとりもどす—』(ミネルヴァ書房、2011年)です。学外講師の方にはコラムを執筆していただきました。

これから地域学をみなさんに紹介します。ただし、紹介する役割は私で終わりです。次の世代は地域学にさらに何を積み上げることができるか、チャレンジしていただきたいと思います。

チャレンジするのは教員だけではありません。授業時間の最後にみなさんにコメントを書いてもらいます。授業が終わると、教員は集まってそれを読んで意見交換をします。授業の成果を確認し、授業に活かすためです。他にもねらいがあります。コメン

トから「地域学を創る」ヒントを得て地域学を修正し豊かにしたいのです。

参考のためにお伝えしますと、地域学部の使命は2つあります。教育と研究です。教育の目標は、地域をよく理解して、必要な人やものごとをつないで課題の解決に取り組むことのできる人材を養成することです。研究の目標は「地域学の確立」です。2つとも大変困難な課題ですが、「総説」はどちらにも関わっています。人材養成のための授業であると同時に、「地域学の確立」に向けた研究の場でもあります。「地域学の確立」は教員の仕事ですが、皆さんにも参加してほしいのです。「地域学を創る」のは教員と実践者と学生の協働作業だと考えています。

そのためには、これから行われる講演から知識を仕入れるだけでは十分ではありません。講演される方が「何を大事にしてやってこられたのか、どのような考えをおもちなのか、何に衝き動かされているのか」など、よく考えながら、聴いてほしいのです。それは自分のなかに「生きた知」を吸収するためのトレーニングでもあります。このような態度で授業に臨めば、みなさんも「地域学の確立」に貢献できるはずです。

大変だと思うかもしれませんが、チャレンジするのは結構楽しいです。みなさんがコメントで書かれることを含めて、8回目に先生方がまとめた議論をされるはずです。私がこれからお話することがどのように受け止められ、批判され、修正されるのか、さらに今年の総説で何を見出し、積み上げることができるのか、楽しみにしています。

それでは本論に入ります。最初に地域学のエッセンスを紹介し、次に私がどのようにして地域学を創ってきたのか、お話しします。

1. 地域学のエッセンス

(1) 地域学の背景

まず、地域学の背景についてお話しします。地域学を構想するとき、私の頭に浮かんだのは「地域とは何か」「なぜ、今、地域なのか」という実に素朴な疑問でした。しかし、この疑問は、「私たちの生にとって地域はどのような意味をもっているのか」という根源的な問いでもあります。それを私は学外講師の方々から教わりました。これからそのうちのいくつかを紹介しますので、皆さんも考えてみてください。

最初に、島根県大田市大森町で群言堂という服飾ブランドを経営されている松場登美さんです。群言堂は年商十数億円の会社ですが、正式には「石見銀山生活文化研究所」といいます。松場さんはお仕事

を通して「暮らしをデザインし、暮らしを楽しむこと」を提案されているのです。松場さんには『群言堂の根のある暮らし—しあわせな田舎 石見銀山から—』（家の光協会、2009 年）という著書がありますので、少し紹介します。これまでも何度も引用した言葉ですが、今回も紹介します。

山の中腹から眼下を見下ろすと、緑深い山あいには赤茶色の瓦屋根がきらめく集落を一望することができます。四方を山に囲まれた、まるですり鉢の底のような小さな町。この場所に身をおくと、自分が今ここに生きていることをひしひしと感じ、氣力が湧いてくるのです。ここが私の居場所。大丈夫、ここでならやっていける。（2 頁）

この「集落」は「石見銀山」という世界遺産の町で、16 世紀から 19 世紀まで天領の鉱山町として栄えた歴史をもっています。江戸時代の史料には人口 20 万人を数えたとありますが、現在は少子高齢化と過疎化で、住民は 400 人を切っています。それでも昔を偲ぶことのできる美しい町並みが残っています。

松場さんは、山々に囲まれ、過去の積み重なった大森町の古民家で、暮らしを楽しみながら、エネルギーと着想を得て、デザインをされているのです。それが大都市の人々に受け容れられているようです。松場さんの著書は台湾で翻訳出版されましたし、韓国でも出版されるそうですから、海外でも松場さんのお考えと暮らし方への共感があるのでしょう。因みに「根のある暮らし」とは自然や過去、人々と結びついた暮らしのことです。

もう 1 つ、東京在住の作家、森まゆみさんの言葉を紹介します。森さんは『谷根千』という地域雑誌を長い間出してこられた方です。「谷根千」とは谷中・根津・千駄木のことです。江戸以来の歴史が残る町ですが、行政上「谷根千」という「町」があるわけではありません。「暮らしを大事にしたい」と思ったとき、意識にのぼってきた「自分たちの町」だそうです。

講演で森さんはこういわれました。様々な人々の人生や思い出がしみついた建物や風景をみると、暮らしの連続性と土地や人との関わりのなかで自分が「生かされている」と感じます。「心の落ち着き」と「癒し」を与えてくれます。そして「歴史が降り積もっているところで暮らすことは、生を豊かにしてくれます」と。森さんは、自分自身を超えた、永続的な何かとつながっているという感覚が人の生にと

って欠かすことのできないものであることを、美しい言葉で表現されたのです¹。

松場さんと森さんのような暮らしを大変羨ましく思います。お二人が語られているのは「生きられた地域」です。このような感覚が「地域」の核にあるとすれば、「地域」という言葉で表現されるものには、「何か、奥の深いもの」があるようです。

この点について、エネルギー研究者である東北大学名誉教授の新妻弘明さんの講演から考えてみましょう。新妻さんは仙台にお住まいで東日本大震災の被災者です。地震と津波に破壊され、瓦礫がえんえんと広がるなかに、人の姿がポツンと小さく見える、そんな光景を前にして、新妻さんは思ったそうです。自然のとてつもない力と人間の無力さ、小ささ。「もうわけがわからない。でも生きていかなければならない。」そういう状況に放り込まれたとき、「みんな、必死で考える、考えるというか、身体で思う。そうすると誰もが哲学者になる。」そして「これまで見えなかったものがいきなりあらわになった」と。

新妻さんが痛切に感じられたのは、自然のすごさ、ありがたさ、恐ろしさと優しさです。人は自然と向き合って、折り合いをつけて暮らしてきたこと、自然とともにある「いのち」、そして「死」です。

新妻さんはまた次のようにいわれました。人は自然のなかで動植物など様々な「いのち」と依存し合い、つながって生きてきた。互いの「いのち」を慈しみながら暮らしてきた。また何世代もの死者の思いを背負って、託された「いのち」をどう生かすのか自問しつつ、後に続く世代のことを考えながら生きてきた。このような関係性の全てによって成り立っているのが「地域」である。世界を驚嘆させた被災者のすごさは、このつながりの豊かさからきている、と²。「身体で思う」とき、見えてきたのは、「自然」「いのち」「関係性」「つながり」、そして「地域」だということです。

もう 1 つ、新妻さんと同じように厳しい状況に直面された方の言葉から考えてみましょう。2015 年に口永良部島で火山が噴火して島民全員が屋久島に避難して 1 か月ばかりたった頃です。テレビでニュースを見ていると、避難住民の言葉にとても驚いて、急いで書き留めました。正確ではないかもしれませんが、男性は次のようにおっしゃいました。「避難暮らしをしてはじめて、島の自然や土地、人たちといかに深くつながって生きているのか、よくわかりました。それから切り離されていると、自分の存在が薄れていくような気がします。生きているという感じがしなくなります。早く戻りたいです」と。

これはとても深い意味のある言葉です。この方は、自然を含めた、島の様々なものとの「つながり」のなかに自分の存在の確かさと「いのち」を感じているのです。「いのち」は「つながり」や「関係」のなかにあることを短い言葉で表現されたのです。新妻さんと同様に、日常の様々な「つながり」をいきなり断ち切られて身体全体で感じとって出てきた言葉だと思います。

男性の言葉は、「生きるとは関係を結ぶことだ」、あるいは「様々なものと関係を結んでこそ生きられる」と言い換えることができます。この点について、哲学者の内山節さんの言葉に耳を傾けてみましょう。内山さんは次のように述べています。

多様な関係をつくることは人間の本質に属し、関係をもたなくなることは人間の自己否定である。様々な関係のなかで、他者から働きかけられることによって、人間は自分の存在の意味を感じとっている。「他者にはいろいろなものがある。自然も重要な他者だろう。自然とともに生きてきた人たちは、自然からの働きかけのなかで自分が存在していることを知っているし、この関係こそが自分を自分たらしめている重要な要素である。もちろん他の人々も重要な他者だ。私たちの多くは他の人々から働きかけられているなかで仕事をしているし、暮らしをつくりだしている。自分も他者に働きかけている。それは自然という他者に対しても同じことだろう。この働きかけられ働きかける関係のなかで、私たちは生きているのである。文化という他者からの働きかけもある。歴史という他者からも、死者という他者からも私たちは働きかけられている。そして働きかけている。」³

内山さんのいう「他者」とは、「他の人々」だけではなくて、「自然」「文化」「歴史」「死者」も含みます。このような他者と自己との相互的な関係のなかに私たちの「いのち」はある、生はある、といわれるのです。内山さんは、自然との関係をはじめ、「身体で」「いのちで」つかみとった関係を「確かな関係」と表現されています。

私は、このような感覚、人と世界の捉え方にとっても共感しています。しかし、かつては違いました。私が引きつけられたのは、西欧近代が理想としてきた人間像や社会像です。それはここまで紹介してきたのとはまったく異なるものです。このことを、フランスを例にして、考えてみましょう。

フランス近代が目指したのは、原理的には、人々の生活を支えてきた土地・伝統・習俗・社会関係などとの「つながり」「関係」を「人間を縛るもの、拘

束するもの」と否定して、それから人間を引き離すことでした。これこそが「自由」であり、このような意味で人間を「自由な」個人につくり変えようとしたのです。ここでいう「個人」は、自らの知性・理性を信頼し、それを行行使して、合理的に判断し選択することのできる人間です。重視されたのは「個人の意思」であり、「個人の自由」でした。そしてこれが唯一の価値の源泉になりました⁴。

諸々の関係から切り離されて、原理的に同質的な存在となった個人の生活を成り立たせるのは、国家の「法」「制度」「市場経済」です。人間は「自由な個人」として「国家」と「市場経済」と関係を結んで生きる。そうすることで「幸福」を実現できる、と考えられたのです。

しかし、国家が制度で生活を保障することは可能なのでしょうか。制度は税金で維持・運用されますから、少なくとも税収の安定的増加とそれを支える経済成長が必要です。歴史的にみれば、西欧諸国は、17世紀以降、とりわけ19世紀に、世界の他の国々や地域の人々を犠牲にして富を独占しました。そうして制度をつくり、社会基盤を整備して、国民の生活を、ある程度、保障したのです。

しかし、今や「先進国」が世界の富を独占する時代は終わりました。冷戦が終わってグローバル化が進むなかで、経済発展を遂げる「新興国」や「途上国」との間で低価格競争を余儀なくされています。国外への工場移転、非正規雇用の広がり、社会保障の切り下げ、増税など、人々の生活は徐々に悪化しています⁵。

こうした傾向は、第二次世界大戦後の高度経済成長が終わった1970年代末から1980年代以降に出てきました。福祉国家は維持できなくなり、フランスやイギリスで「社会的排除」や「社会的包摂」という言葉で、どこにも「居場所」をもたない人々の存在がクローズアップされました。1990年代以後に顕著になったグローバル化は事態をさらに悪化させました。

問題は、社会が流動化するにつれて、制度が機能できなくなっていることです。「個人化」が進行して、人々は結びつきを失い、ばらばらになってしまいました。「集団的なもの」に守られなくなって、社会的なリスクに直接さらされています。状況の克服を「自己責任」として個人に求める、そんな時代になったのです⁶。

ご存知のように、フランスで「ジレ・ジョーヌ」（黄色いベスト）運動が問題になっています。その背景にあるのは「生活ができない」という厳しい現

実です。私には、参加している人々が生活の困難を「自己責任」として引き受けることを拒否しているように見えます。実際、参加者はフランス政府の政策全体を批判しています。容易に鎮静化しそうにはありません。デモが暴徒化する場合もあり、かなり深刻な状況です。

不安な兆候は以前からありました。たとえば、2005年に移民の「暴動」とされるできごとがありました。20日間で9000台もの車が、夜間に焼かれたのです。非常事態を宣言した都市もありました。警察が「暴動」終息宣言をした時でも一晩で200台を超える車が焼かれていました。それでも「終息」だということです。信じられないことです。移民の若者たちには、就職などの差別やフランス社会に溶け込めない疎外感があったとされています。

しかし、これは移民の若者たちだけの問題ではありません。特に何も大きな事件のなかった2012年をみてみますと、1年間に4万台もの車が焼かれているのです。大晦日だけで1067台です。平均すれば、1日110台になります。動機は「気晴らし」「意趣返し」など様々で、車を焼いたのは移民の若者に限りません。その多くは男性で、無職か学校の生徒です。4分の1が17歳以下の未成年者です。『ル・モンド』紙はこの状態を「フランス固有のフォークロア」と表現しています。車を焼くことが常態化して伝統になっているというのです⁷。フランス社会はすでに深刻な事態に直面していたのです。

日本で注目すべきは、高度経済成長が終わって、1980年代に「地域」という言葉が広く用いられるようになったことです。地域名を冠した地域学や地元学も登場しました。その背景には経済重視の開発が急速に進むなかで失われつつある地域の豊かさや良さを見直し、守っていききたいという思いがありました。「暮らしの場を見つめて、そこから誇りとエネルギーを獲得し、住民一人ひとりが主体性を取り戻すための空間に変えていく試み」が始まったのです⁸。

ここまでのまとめますと、「先進国」とされる国々でも日本でも、「近代の見直し」とでもいうべき方向に向かっている、ということです。「地域とは何か」「なぜ、今、地域なのか」という問いからスタートして見えてきたのは、このような大きな理解でした。この認識を深めつつ「地域学」の輪郭が少しずつできてきました。

(2)「地域学」のエッセンス

それでは地域学を紹介しましょう。ただ、あらかじめお断りしておかなければならないことが2つあ

ります。前回、「地域学講義」という、2017年度に行った講義の原稿を配りました⁹。そこで地域学を詳しく述べていますので、今日は地域学の核になる部分だけを紹介することにします。

それからもう1つ。これからお話する地域学は「地域学総説」などを通してできたのですが、私の見解がかなり入っています。正しくは「私の地域学」というべきものです。そのつもりで聴いてください。

鳥取大学の地域学部ができたのは2004年ですが、その前に1999年度～2003年度まで「教育地域科学部」の時代がありました。「教育学部」に「地域科学」を加えた学部です。国立大学で「地域」を学部名につけたのは1997年創設の岐阜大学の「地域科学部」が最初で、鳥取大学は2番目です。早くから「地域」にフォーカスしたわけですが、実をいいますと、わたしは大反対でした。しかし、随分後になってようやく気がつきました。「地域」を選択したのは、国家と社会の変化にいち早く反応して、「変化の意味を問い、これからどうするのか」を「地域」という枠組みで考えようとしたからではないか。そのような志向性をもった人材を養成することに社会的な意義を見出したのではないか、ということです。

地域学部は創設文書のなかで学部の使命の1つを「地域学の確立」としています。とてつもなく難しい仕事ですが、2011年に『地域学入門』を出版したことは「地域学の確立」に向けた大きな一歩でした。そのとき書名があまりにも平凡なので、サブタイトルを工夫して、「〈つながり〉をとりもどす」にしました。というのは次のように考えたからです。私たちは様々な「つながり」に支えられてきたはずですが、それを実感できなくなっているのではないか、あるいは、失ってしまったのではないか、それが生きにくさや虚しさ、不確かさを生む一因なのではないか、地域が注目されるのも「つながり」をとりもどしたいという根源的な欲求があるからではないか、ということです。

ここでいう〈つながり〉は人と人との結びつきだけではありません。人と自然との関係、過去や死者との関係、未来との関係を含めて、人の生に関わるすべてのもの、すなわち「他者」です。〈とりもどす〉とは、昔に戻ることではありません。「他者と関係を結び直す」という意味です。

それでは、人と地域はどのような関係にあるのでしょうか。地域学部では、地域について、学部創設時に「人々が生活している空間の広がりとそのでの社会関係」と説明しています。また、地域とは、人間の生活をトータルにみたときに現れてくる、〈つな

がり)や関係の集まったものである、ということもできます。いずれにしても、地域には地域性という独特の関係性があり、それが人の個性の一部になっています。つまり、私たちは地域の自然・歴史・文化などが織り込まれた存在だということです。したがって、地域(性)が人の生においてもつ重要性を認めて、尊重しなければなりません。講義の冒頭でいくつか例を挙げて説明しましたので、地域の重要性はわかっていただけたと思います。

とはいえ、人と地域(性)との関係はなかなか複雑です。地域(性)は「拠りどころ」の1つだと思いますが、人の振る舞い方、ものの考え方や感じ方を枠づけ制約してもいます。疎ましい部分もあるのです。また、人は同じところに住み続けるわけではありません。この意味で、たった1つの地域性というよりも、様々な地域性を受け容れながら、あるいはぶつかって葛藤し折り合いをつけながら、生きていくと考えた方がいいでしょう。

次に、地域を見る視点です。視点とは、地域性と人の生との関係を尊重しようというとき、どこに足場を置いて、何を見据えながら考えるか、ということです。私たち教員は地域学にとって必要な視点を、学外講師のご協力もいただきながら、一つ一つ確認してきました。最も重視しているのは、「〈私〉の〈いま、ここ〉からの視点」と「生活の視点」です。まずは「自分の足元」をよく見てみよう、自分で責任もてる小さな世界にしっかりと向き合おう、そしてそこから大きな世界へ視野を広げていこう、ということです。

このほか、地域の構造を把握するための「客観的・構造的視点」、地域を長い時間の蓄積と未来に深く関わるものとして見る「歴史的視点」、地域を変化に対して「開かれた」ものとする「移動の視点」も重要です。これら5つの視点については配布した「地域学講義」で詳しく説明していますので、後で確認してください。

ここで地域学の目的と独自性を紹介します。私たちは「安心して幸福に生きていく」ために、地域性を含めて、なにがしかの条件を必要としています。この条件とは何か、それを実現するにはどのような方法があるのか、こうしたことを考えるのが地域学の基本的な仕事です。これを人間の関係についていいますと、私たちは、人と人との結びつきや支え合う関係とそのための場を必要としています。このような「関係」と「場」に必要な諸条件とそれを実現する方法を考えるのも地域学の役割です。

つまり、地域学の目的と独自性は、「誰もが人とし

て生きやすい状態」の実現、私たち「一人ひとり」の「生の充実」や「私たちの幸福」の実現を、「地域」という空間的な枠組みに着目して、地域性と歴史性を尊重しつつ、5つ視点から考えることです。

そのために必要なまなざし・態度・作法を検討してたどり着いたのが、生活者として、当事者として、自らを省みながら、足元から「つながり」や関係を見つめ、「確かな関係」を再構築しよう、ということです。

その際、常に視野に入れておくべきもの、出発点とすべきもの、立ち返るべきものは、自然とともにある「いのち」です。「自然と人間の関係」をしっかりと見つめて、そこから人の生と生活を考えることです。このことを新妻さんは「いのちをいただき、いのちをいかす」と短く表現されました。

最後にお伝えしなければならないのは、このような根源的な問いと要請に応えようとするとき、あらゆる学問領域と、「生活の知」や「実践の知」などあらゆる知が動員されることです。地域学は「学術の知」と様々な知との間で往復運動をすることで豊かさを増し、深化していくのです。だからこそ、私たちは学外講師をお招きしているのです。

まとめますと、「地域学」の核にあるのは「自然」と「いのち」と「関係性」です。一人ひとりが「いのち」を生き切るために、「つながり」をとりもどして、確かな関係を再構築したいという願いです。それを実現するために、「いのち」と「生きること」を見つめつつ、「他者と関係を結んで」生活することを重視する。これが私の考える「地域学」のエッセンスです。

2. 「地域学」のつくり方

ここからは私がどのようにして「地域学」を創ってきたのか、お話しします。私はこれまで地域学の論文のようなものを19編書いてきました。これに地域学の意図をもって書いてきた「東アジア関係」5編と「国際地域文化関係」1編を加えますと、全部で25編になります。

地域関係の授業に関わり始めたのは1999年です。それ以来、まる20年が過ぎましたが、論文もどきを書いたのは2006年度が最初です。「地域学総説」1年目に『『地域学総説』の挑戦』というタイトルで書きました。授業をすること自体が「挑戦」でしたので、関係教員で話し合っ、授業内容を整理・分析して『地域学論集』に掲載することにしました。成果を記録して、蓄積しようとしたのです。その書き手が、当時、最も暇だった私になりました。それに

しても13年間で25編も書くことになるなど、思いもしませんでした。

正直なところ、「歴史学に専念していれば、研究が随分進んだだろうに」という気がしないでもありません。しかし、自分自身を研究対象にしてみれば、そこまでして書かせる何かがあったということでしょう。「それはいったい何のか」を私に影響を与えた書物や研究を振り返りつつ、考えてみます。それが私の「地域学のつくり方」を説明することになります。個人的事情を含めて話しますので、ご容赦願います。

私は、文学部で日本史を学びたかったのですが、周りから就職できないといわれて法学部に入学しました。ところが、講義も法律学自体も全然面白くなくて、退屈でした。そんなとき、法律学の基礎ゼミで先生が、学生があまりにもものを知らないことに呆れて、「君たち、学生なんだから、本を読みなさい。最低でも1年に100冊くらいは読みなさい」といわれたんですね。そういうものかと思って、とりあえず年間100冊読むことを目標にしました。ついにて「読書ノート」を書くことにしました。そのおかげで、法学部時代に、いつ、どんな本を読んで、どのような理解を得たのか、ある程度わかります。

いろいろ読んだ本の中で、私の人生にとって最も大きかったのは、芹沢光治良さんの文学作品に出会ったことです。ご存じないでしょうから、少し芹沢さんの紹介をします。芹沢さんは静岡県の漁村の豊かな網元の家に生まれました。しかし、両親が天理教に帰依して財産を教会に捧げたために、食うに困る、極貧の生活になってしまいました。それでも様々な人たちに助けられて、旧制沼津中学・一高・東京帝大経済学部で学び、農商務省の官僚になりました。作家ではなく官僚になったのは、貧しい人々の暮らしをよくしたいという強い思いがあったからです。ですから、作品の中で、何を食べどのような暮らしをしているかがよく描かれています。芹沢さんにとって「生きる」とは「食べること」から始まるのです。また、人の暮らしを破壊しかねない宗教や宗教組織について、その存在意義を厳しく問い続けることにもなりました。

芹沢さんの文学を考えるともう1つ重要なのは、自然との関係ではないかと思います。芹沢さんは1920年代後半に農商務省を休職してフランスのソルボンヌ大学の大学院で経済学を研究されました。このときデュルケイム学派の社会学も学ばれました。そのほか、哲学・文学・演劇・音楽・美術などフランス文化を、様々な人々との交流を通して、貪欲に

吸収されました。

しかし、無理がたたって、当時、死病とされていた結核にかかって、フランスとスイスの高地にあるサナトリウムで療養を余儀なくされました。毎日2時間以上散歩し、真冬にもベランダのベッドで、何時間も何も考えず、眠ることもせず、まるで自然と一体化して生命力を呼び覚まそうとするかのような日々でした。このとき、「生命を歓喜に燃やするような仕事がしたい」、もし命があれば文学に生きよう、と決意されたのです。大自然と向き合い、「いのち」を通して感じ取られたことが、作品にずっと生きていると思います。

私が最初に読んだ作品は、『人間の運命』（新潮文庫）という全7巻の大河小説です。法学部の2年生のときですから、1976年のことです。自伝的要素の強い作品で、明治・大正・昭和の厳しい時代と人々の生き方を主人公の歩みを中心に描いています。舞台は静岡県の貧しい漁村から始まって東京へ、そしてフランスなどヨーロッパに及んでいます。この他にも、芹沢さんの作品はたくさんあります。戦後まもなくフランス語に翻訳された小説はヨーロッパで高く評価され、受賞しています。ノーベル文学賞の候補にもなりました。それらを含めて、私は数多くの作品を何度も繰り返し読むことができました。とくに、精神的に苦しくなったときは、作品を読んで、自分を立て直してきました。作者の魂の波動が伝わってきて、生きる気力が湧いてくるのです。

もちろん、読み方はその都度変わっていきました。『人間の運命』の場合、2回目からは、登場人物たちがなぜあのように語るのか、振る舞うのか、喜ぶのか、悩むのか、登場人物になったようにして読みました。他人の気持ちを理解するトレーニングをしたようなものです。

また、「芹沢さんが何を大事されているのか」、読み取る努力をしてきました。人間観や世界観を知ろうとしたのです。それは「芹沢さんの精神をわがものにしよう」とすることでもありました。私は自分がどう生きるのか、模索していたのです。

次に、なぜ研究の世界に入ったのかといいますと、直接的なきっかけは個人的な問題でした。3年生のとき、1977年ですが、中央公論社の『世界の歴史』全16巻を読みました。研究書ではなくて、一般向けの本です。第1巻から楽しく読み進めました。ところが第10巻の『フランス革命とナポレオン』でなかなか先に進めなくなりました。「フランス革命で人間が変わった」と感じて、「なぜ変わることができたのか」と疑問に思っ、あちこちで引っ掛かって考え

込んでしまったのです。

というのは、私は「自分を変えたい」と思っていたからです。ひどく短気で、人と話すのは苦手。人の気持ちもわからない、そんな状態でした。それをはっきりと自覚したのは中学生の頃です。「これではいけない、何とかしよう」と思ったものの、どうしたらいいか、わかりませんでした。私がフランス革命に魅力を感じ、後に研究対象とするようになったのは、まったく個人的な理由からでした。

法学部を卒業後、1979年に文学部に学士入学しました。昼間は仕事をし、夕方に大学に行って講義を受けました。フランス革命について研究するためです。文学部ではひたすら横文字の研究書を読みました。ところが、具体的なテーマを決めることができませんでした。それで専門家の前川貞次郎先生に相談したところ、革命期の非キリスト教化運動の研究を勧められました。キリスト教を根絶やしにして革命礼拝を打ち立てようとした運動です。先生から文献リストをいただき、読むべき文献も指示されました。それがアルベール・マチエーズの『革命礼拝の諸起源』¹⁰でした。出版が1904年ですので、80年近くも前の研究書を読むよう勧められたのです。1980年のことです。

読んでみて大変驚きました。人間と社会の「再生」について論じていたからです。革命家たちには、人間の理性と知性の力で、法と諸制度と教育によって、人間の幸福を地上で実現できるという、信仰に近い確信があった。フランス革命には「聖なるもの」を求める集合的欲求が一貫してあった、とマチエーズはいうのです。

マチエーズは社会学者エミール・デュルケイムの宗教理論¹¹に依拠してこのような理解に至りました。デュルケイムは、「宗教現象の本質は、義務的な信仰と一定の儀式との結合にある」。「神の観念をもたない、社会の自己表象を聖なるものとする宗教が存在する」と主張していました。この宗教理論に従ってマチエーズはフランス革命期の諸現象を分析しました。そして、信仰の対象（革命が樹立しつつある社会体制そのもの）、義務的教義（人権宣言と憲法）、神秘的シンボル（三色旗、自由の木、祖国の祭壇など）、諸々の儀式（市民祭典）、祈りと賛歌を備えた「革命礼拝」「革命宗教」が存在したという結論に至ったのです。

私はすごく面白いと思いました。そして「個人からなる社会がばらばらにならずに1つにまとまっていられるのは、なぜなのか。なぜ秩序を保つことができるのか」という疑問をもちました。『革命礼拝の

諸起源』から伝わってきたのは、「ある種の宗教が社会や国家を支えているのではないか」ということです。この問いは、「人間と社会が生まれ変わるとはどのようなことなのか」という疑問とともに、「世俗化していく近代においても、宗教や『宗教的なもの』が人と人をつなぎつけ、深いところで秩序を支えているのではないか」という問いになりました。

私は「人と人をつなぎつけるものは何なのか」というデュルケイムとマチエーズの問いを引き継いだのです。そしてこの問いを掘り下げたくて大学院に進学しました。

驚いたことは、もう1つあります。実は芹沢さんの『人間の運命』やそのほかの作品もデュルケイムの研究と深い関わりがあるのです。芹沢さんはデュルケイム学派の社会学や宗教理論を現実の理解と作品に活かしています。「人間の心の中にある神聖なもの」をととても重視されているのです¹²。

私は、なぜフランスとフランス革命に興味をもったのか、決まっていた就職を辞退してまで文学部に入ったのか、なぜ『革命礼拝の諸起源』に魅了され、研究生活に入ったのか。今、改めて振り返ってみますと、私自身が課題を抱えていたことに加えて、芹沢さんの影響があったと思います。

次に、私が重視しているフランスの歴史学の視点と方法論について紹介します。とくに「マンタリテ」と「ソシアビリテ」です。「マンタリテ」は「心性」と訳されています。「ソシアビリテ」は「社会的結合」とか「人と人との結び合うかたち」です。この2つについて、二宮宏之先生の『全体を見る眼と歴史家たち』（木鐸社、1986年）と『歴史学再考—生活世界から権力秩序へ—』（日本エディタースクール出版部、1994年）から学びました。

少し概念の説明をします。「心性」とは、「感じ考えるその仕方」「心のありよう」「心の習慣」と訳されています。生活空間のなかで育まれ、ほとんど意識すらされないで人と人をつなぎつけているものです。「社会的結合」は、この心性、心的な絆によって形成されている、人と人との結び合う関係のことをいいます。

社会的結合には2つの側面があります。相互に支え合う「きずな」の側面と、個々人を慣習の網の目にかからめとる「しがらみ」の側面です。絆が形成される契機に着目すると、「空間的な絆」と「機能的な絆」の2つが考えられます。「空間的な絆」は、どのような空間で結び合う形ができるのかに着目したものです。生活の場である村や都市であれば「街区」、少し大きくなって通婚圏や交易圏などのコミュニケ

ーション網、最後に言語・習俗・慣習法などの共同性に支えられた「地域」です。「機能的な絆」とは、パン職人や靴職人のように、職業を通して生まれる職能的結合、宗教信仰による結合などです。

「心性」と「社会的結合」は、人々がものを感じ、考え、判断し、行動する基盤そのもので、集団を形成するプロセスと深く関わっています。普段は目に見えませんが、変化を生むこともあれば、逆に変化を拒否することもあります。極めて重要な結果につながる可能性があるのです。

心性と社会的結合の関係をもう少し考えてみます。基本的な発想は「からだ」と「こころ」という人間の一番元のところから考えることです。「身体性と心性を起点として、そこから人間たちの結び結ぶ社会的結合関係を捉えよう」というのです。表1～3¹³をご覧ください。それぞれ身体性、心性、社会的結合を示しています。3つの表から、人が何と関わりながら生きているのか、どのような問題群があるのか、どのように関連しているのか、わかります。

ここまでをまとめますと、「歴史を、その時代を生きた一人ひとりの人間において捉え」るために、「からだ」と「こころ」から社会的結合関係の把握へと進み、生活世界を起点にして権力秩序を捉え直し、両者の相互的な関係を考えようということです。このような歴史学を「深層の歴史学」、「歴史人類学」といいます。

「深層」については、次の引用文から感じ取っていただきたいと思います。フランスの歴史家フェルナン・ブローデルの言葉です。私のお気に入りの文章で、これまで何度も引用してきました。

私が出発したのは日常性であった。生活の中でわれわれはそれに操られているのに、われわれはそれを知ることすらしないもの。習慣（l'habitude）—慣習的行動（la routine）と言うほうがいいかもしれない—、そこに現れる何千という行為は、それら自身で完遂され、それらについて誰も決定せねばならないということではなく、本当のところ、それらはわれわれのはっきりとした意識の外で起こっている。人間は腰の上まで日常性の中に浸かっているのだと私は思う。今日に至るまで受け継がれ、雑然と蓄積され、無限に繰り返されてきた無数の行為、そういうものが、われわれが生活を営むのを助け、われわれを閉じ込め、生きている間じゅう、われわれのために決定を下しているのだ。こうした行為を行なわしめる刺激、衝動、規範、様式、

あるいは義務は、われわれが思っている以上に多くの場合、人類史の起源にまで遡るのである。非常に古く、しかもなお生き生きとした何世紀をも経た過去が、アマゾン川が大量の濁水を大西洋に流し込んでゆくように、現在という時間の中に流れ込んでいるのである¹⁴。

二宮先生は、生活世界の深層から全体を捉えようとする歴史学を「全体史」と呼んで、「全体を見る眼」の必要性を強調されています。

次に具体的な研究を見てみましょう。ティモシー・タケットが1986年に発表した『18世紀フランスにおける宗教、革命、地域文化』(T. Tackett, *Religion, Revolution, and Regional Culture in the 18th century France*, Princeton, 1986) という研究書です。タケットは、フランス革命という政治的大事件が人々の暮らしの場にどのような影響を与えたのかを考えました。暮らしの場とは、カトリック教会の最小単位である教区です。農村では、おおむね1つの村が1つの教区になっていました。そこで大きな役割を果たしていたのが聖職者でした。非キリスト教化運動を含めて革命は教会と聖職者を直撃しました。人々の生活に深刻な影響を与えたに違いないのです。

私たちの社会では、国や自治体が重要な役割を果たしています。戸籍、教育、医療、労働、社会福祉など、様々な制度のおかげで生活ができます。革命前のフランスでは、こうした役割のほとんどをカトリック教会が担っていました。教会は全国を4万もの教区の網の目で覆っていました。村の中心には教会と墓地、広場と居酒屋があり、遠くからでも見える教会の塔が村のシンボルでした。教会には主任司祭が1名、そのほかに助任司祭がいて、教区の人々の信仰を導き、生活全般にも深く関わっていました。

当時は、読み書きできる人はごくまれで、聖職者は貴重な存在でした。出生・結婚・死亡を記録したのは聖職者です。村人がよそに行くときは、証明書など必要な書類を作り、町で働きたいといえば、世話しました。また、農業の知識を農民に伝えました。このほかに国家の仕事もしました。日曜日に教会でミサが終わった後、文書を読み上げて国家の法律や決定を伝えたのです。司祭は、村と外の世界をつなぐ媒介者として村の生活に不可欠な存在でした。

16世紀半ば以降の対抗宗教改革で、カトリック教会は信者に規則正しく宗教実践を行うよう求めました。なかでも、日曜ミサへの参加を重視しました。18世紀になると、村人のほとんどが日曜日に教会に集まって、同じ宗教儀式に参加し、同じ説教を聴く

ようになった、と考えられています。

つまり、村の教会が聖職者を中心として人と人々が結び合う場、社会的結合の場となって、人々は共通の心性を獲得したということです。これを別の観点から見れば、村の教会は、教区という狭い空間を越えて、フランスという大きな空間に共通するカトリック信仰や政治的イメージに向けて人々を統合する場でもありました。村の教会は「社会的結合」の場であると同時に、「社会的統合」の場でもあったのです。その要の位置にあったのが聖職者でした。

フランス革命になると、聖職者は憲法への宣誓という形で革命への態度表明を求められました。宣誓をするか否かは革命支持か反革命という政治的に重大な意味を帯びたのです。こうして村の生活の核心部分を革命が直撃したのです。

タケットが膨大な情報をコンピューター処理し、様々な全国地図を作成・比較して出した結論は、とても大きなものです。それによれば、革命前に、異なる文化をもつ2つの地域が秘かに生まれつつありました。1つはキリスト教の伝統の強い文化、もう1つはキリスト教の価値観から次第に離れていく文化です。それが宣誓問題によって顕在化し、さらに結晶化・政治化して、宗教的・政治的文化を異にする「2つのフランス」が誕生しました。革命の理念と諸原則によってフランスをつくっていくのを当然視する地域と、王権とカトリシズムの伝統こそがフランス本来の姿であるとする地域です。19世紀はこの2つの理想、2つの地域が激突する時代になった、というのです。

タケットは、パリでの政治的決定が地方でどのように受け止められ、化学反応を引き起こし、新たな衝突を生み出したのか、新たな秩序の形成に至ったのか、という問題を、人々の暮らしの場と宗教に着目して検討したのです。

最後に、1990年に出版されたスザンヌ・デザンの *Reclaiming the Sacred* です¹⁵。訳せば『聖なるものをとりもどす』です。フランス革命期のヨヌ県という地域の宗教復興について論じた研究書です。

内容を紹介しますと、フランス革命期に非キリスト教化運動が起こり、聖職者は聖職や信仰を無理やり放棄させられました。結婚させられた聖職者もいます。すべての教会が閉鎖され、政治クラブの集会所や倉庫、馬小屋などになりました。様々なものが破壊されましたが、同時にキリスト教に代わる擬似的な宗教が現れました。「理性の礼拝」や「自由の殉教者の礼拝」、「最高存在の礼拝」、マチエーズのいう「革命礼拝」「革命宗教」です。人間性と革命の理念

を讃え、礼拝したのです。しかし、それは、革命に賛同しつつも、教会に集まってみんなでカトリック礼拝をしたいと願う人たちにとって耐え難いことでした。

そうした人たちのなかには、非キリスト教化運動終了後に、教会で礼拝ができるようにしようと積極的に行動した人たちがいました。教会と教会での礼拝は村の伝統的な生活や文化的な枠組みと分かちがたく結びついて、共同体として生きていくためになくはない「聖なるもの」となっていたのです。だからこそ、なんとしても「とりもどそう」としたのです。

何から「とりもどそう」としたのかといえ、まずは教会を閉鎖した革命からですが、それだけではありません。住民たちには昔から伝承されてきた、生活と密着した、独特な信心形態がありました。それはカトリック信仰と結びついていましたが、聖職者からみれば根絶すべき「迷信」でした。聖職者は17世紀以来、住民の信仰を「純化」しよう努力を重ねてきたのです。

カトリック信仰の「純化」について、例を1つ紹介しましょう。聖母マリアがどのように描かれてきたかを見てみますと、16世紀の前半くらいまでは、胸をはだけて幼子イエスにお乳を与える姿を見ることができました。普通の母親の姿です。ところが、17世紀以降の絵画になると、カトリック教会の方針でそういう描かれ方はされなくなりました。マリアもイエスもとても厳かになりました。カトリック教会のよしとする「聖なるもの」は、村人の日常の暮らしから遠いものになっていったのです¹⁶。

非キリスト教化運動のとき、聖職者は反革命とみなされたため、礼拝を行う司祭が村からいなくなりました。この危機的状況はしかし住民にとってチャンスでもありました。自分たちを抑えつけていた重しがなくなって、「自分たち本来のもの」をとりもどすことが可能になったのです。

革命は人間の自由と平等を主張し、主権は人民にある、としました。信仰の自由と礼拝の自由も認めました。しかし、非キリスト教化運動が終わって宗教復興期になっても教会は閉鎖されたままでした。それで住民は集団で教会に押しかけて教会を開くよう求め、拒否されると、無理やり押し入ってミサを行いました。俗人がミサを行ったのです。これを「白ミサ」といいます。もちろん、カトリック教会にとって許しがたい行為です。

しかし、住民たちは間違った行為だとは思いませんでした。革命が打ち出した原理原則や法律を自分

たちなりに解釈し「自分のもの」として、革命前からの伝統的な抗議方法と巧みに組み合わせて、自分たちの行動を正当化しました。そうして、革命と聖職者の双方から自分たちの「聖なるもの」をとりもどそうとしたのです。

革命以後の状況を紹介しますと、ヨンヌ県では19世紀になっても聖職者不足をなかなか解消できず、俗人礼拝が長い間続きました。住民は聖職者のいない状態に慣れていきました。結局、ヨンヌ県はカトリックの宗教実践者の少ない地域になります。長期的に見れば、非キリスト教化されたのです。様々な要因が絡み合っていますが、革命の理念を「自分のもの」とすることによって住民自身も変化したということでしょう。

デザンの研究を紹介したのは、村人にとって村の生活全体が「聖なるもの」であり、村人がそれを取りもどすために伝統的な方法だけでなく、新しい革命の理念を独自に解釈し「自分のもの」にして行動したからです。大事なのは村の生活まるごとでした。村人はそれを取り戻すために知恵を働かせ、役に立つものは取り込んで活用しつつ、行動しました。そのことに私は着目したのです。研究書ですが、とても感動しました。

私は「聖なるものを取りもどす」という表現と意味がとても気に入って、「聖なるもの」を〈つながり〉に置き換えて、『地域学入門』のサブタイトルを「〈つながり〉を取りもどす」にするよう提案したのです。

マチエーズからデザンまでの研究を紹介しましたが、私自身はこれらの成果に依拠して「フランス革命と長期的持続—聖職者リクルートと宣誓問題を通して—」という長い論文を書きました¹⁷。1997年のことです。

少しだけイギリス史の紹介をします。文学部でとても面白いと思ったのは川北稔先生の講義でした。先生は、普通の人間の生活感覚に根ざした問題に取り組み、具体的な生活のあり方と世界的なつながりに着目して歴史を分析されました。「庶民の生活が世界システムの作用を通じていかに結びつき、今日の状況をつくりだしているか」、これが先生の基本課題です。具体的な研究としては、一般書では、1997年に出版された放送大学のテキスト『ヨーロッパと近代世界』（放送大学教育振興会）がわかりやすいです。この本は、2016年に『世界システム論講義—ヨーロッパと近代世界』として筑摩書房から出版されました。

私自身が川北先生の本で最初に読んだのは、『産業革命と民衆』です。河出書房新社から1975年に出版

されました。私が読んだのは1980年です。この本は「生活の世界史」シリーズの第10巻です。シリーズの謳い文句は、生活の様相から時代像へせまり、そこから新しい世界史像を描く、です。このシリーズは確かに大変面白かったです。ここでは、歴史学が生活の視点から歴史を描こうとしたことに注目したいと思います。そして、私は、生活を世界システムという大きな関係性において捉えるという視点を川北先生の研究から学びました。

個人的な話が随分長くなってしまい、申し訳ありません。私が伝えたかったのは、1999年に地域に向き合うことを求められたとき、私の頭の中に何があったのか、ということです。克服しなければならぬ、私自身の課題がありました。芹沢さんの文学は今もなお私を支える存在です。今回、紹介した歴史学の研究は、私にとって今も重要なものですが、すべて1990年代までに学んだものです。私はこのような知識や捉え方、生き方をもって、「地域科学」と「地域学」に取り組むことになったのです。今思えば、私の構想する地域学と確かに接続しています。問いが同じなのです。

おわりに

講義前半で、地域学と地域学の視点について紹介しました。なかでも私が特に重視して、地域学の核に据えているのは、「〈わたし〉の〈いま、ここ〉からの視点」と「生活の視点」です。2つの視点については、『地域学入門』を見てください。仲野誠先生の執筆された「第5章 生きられる地域のリアリティー—反省の学としての地域学を目指して」と、家中茂先生の「第4章 生活のなかから生まれる学問—地域学への潮流」です。先週配布した「地域学講義」では6～7頁をご覧ください。

今回の講義原稿を用意するために、これまでを振り返ってみて、私が2つの視点に敏感に反応した理由がはっきりしました。地域学に取り組む前から、私のなかに地域学へ接続するものがあったのです。ぼんやりとしていた私の認識を明確にしたのが、2つの視点だということです。

さらにいえば、地域学は歴史学にできないことを可能にしてくれた、といえるかもしれません。というのは、歴史学には、歴史資料をもとに実証的に検討し表現するという厳しい約束事があるからです。どれほど素晴らしい発想であっても、歴史資料の裏付けがなければ歴史研究とはいえないのです。生活世界の深層から全体を捉えようとする二宮先生の全体史構想はとても素晴らしいものです。しかし、歴

史研究としては極めて難しい課題です。私は先生の発想を参照しながら地域学を構想しました。地域学は歴史学固有の限界を乗り越えさせてくれたのです。

逆のこともいえます。マチエーズとデュルケイムの研究は、様々な現象の根底にあるものに目を向けるよう導いてくれました。タケットやデザンの研究から私が学んだのは、住民たちが自らの伝統や文化を踏まえながら、新たなものを独自に解釈し吸収して、現実積極的に働きかけて文化を創ってきたことです。私はこの能動性を地域学に組み込みたいと思いました。私は歴史学から出発し、歴史学の成果を活かして、地域学を創ってきたのです。

最後に指摘しておかなければならないのは、次の点です。「〈わたし〉の〈いま、ここ〉からの視点」と「生活の視点」から現実を眺めれば、「地域の知」「生活の知」「実践の知」が必要であることは、わかりきったことです。「地域学」の視点に立つとき、私たちは自ずと学問の領域を超えることになるのです。実際、このような知に学び、吸収して、地域学に組み込むこと、得られた成果を地域に返すこと。このような循環プロセスに関わることは、とても意義深いことです。

私自身が工夫してきたことも少し紹介しましょう。学外講師の講演のとき、ご本人の執筆されたものを含めて、関連する文献をできるだけ読むようにしました。講演内容を正確に理解しようと思えば、私には知識も経験も圧倒的に不足しているからです。聴く態度としては、まずは講演全体の論理をしっかりと把握するようにしました。ご本人が最も伝えたいこと、お考えの大前提になっているものをつかみとるよう心がけました。また、講演には、部分的かもしれませんが、ときにとても重要だと思われる点がありましたので、忘れないようメモしました。そして、最終的な判断基準の1つにしたのは、私の心がどれくらい動かされているか、ということです。

私にとって大きかったのは、地域学の論文もどきを書いたことです。頭の中を整理し、よく考え、検討して、できるだけ誰にもわかるよう表現することは、ものごとを深く理解し吸収するためのとてもいいトレーニングになりました。

ただ、正直にいきますと、自分の限界を感じさせられたことも確かです。やはり経験がありませんので、実践者のお話を理解するのは難しいのです。表現するのはもっと厳しい。論文もどきを書いていると、それを痛感するのです。講演された方には大変申し訳ないと思います。それでも私なりに頑張りました。おかげで私の理解できる範囲を広げ深くする

ことができました。

地域学総説では語る機会を十分に与えていただきましたので、今日の講義を地域学の最終講義として、あとは次の世代にお任せしようと思います。それではこれで終わります。長い時間、聴いていただきまして、ありがとうございました。

IV. 地域学研究の深化

筆者は第3期法人評価（2016～2021 年度中期目標・計画）において地域学部の「暫定報告」の作成に関わっている。第2期（2010～2015 年度）には「最終報告書」を作成したが、評価の仕事は地域学部の研究教育を振り返るまたとない機会である。それを踏まえてこの10年間の歩みをまとめれば次のようになる。

第2期には、「地域学の確立」という研究目的を実現するために必要な研究体制をほぼ整えた。研究方法としては、「アカデミックな知」だけでなく、地域の実践者から「生活の知」など「地域の知」を学び吸収して、「今、何が重要なのか」を確認しつつ「地域学の核になるもの」を明確にし、「地域学の輪郭」を描くことができた。成果は論文として発表し、『地域学入門』の出版につなげた。

第3期には、地域学は「トランスディシプリナリー（超学際的）な知識創造」へと展開し、実践性をさらに深めている。それは主に家中茂教授を代表とするプロジェクトによって推進されている。正式名称は「トランスディシプリナリー・サイエンス（超学際研究）」：JST-RISTEX「持続可能な多世代共創社会のデザイン」研究開発領域「生業・生活統合型多世代共創コミュニティモデルの開発」プロジェクト（平成27年度～平成31年度、35,605千円）である。

家中教授の報告によれば、「生業・生活統合型多世代共創コミュニティモデルの開発」プロジェクトは智頭町を主要なフィールドにして、地域資源である森林を活かし、自伐型林業を生業としながら多世代が互いにサポートしあって豊かに暮らす、新しいコミュニティモデルの開発を目指している。具体的な課題・目標は4点ある。①生業（経済）と弱体化した集落機能（福祉）を同時に回復する方法、②中山間地域最大の資源「森林」を活かし地域特性を踏まえた地場産業の創出、③中山間地域ならではの福祉のあり方、④地域の生活知（暗黙知）と大学の知（科学知）を統合した「ソーシャルな知」の創出である。

森林資源、生業技術・文化、教育・福祉、移住・

空き家情報などを「資源」と捉えて、それを活かして、住民相互の支え合いを実現することで人びとが暮らし続けられるようにしようというのである。プロジェクトの目的は、「地域に必要なものをみんなで支え、暮らしを持続する」という目標を、様々な知をつなぎ、人をつないで、支援し、必要な仕組みを考え出して達成することである。プロジェクトには、地域学部だけでなく、農学部、工学部等の教員も関わっている。また、智頭町はもちろんのこと、林業・森業、生活支援サービス構築、ICT 設計などの専門家や実践者も集結している。

筆者は、中山間地域が様々な世代が力を合わせて持続可能な暮らしの仕組みをもつ場として息を吹きかえすためのモデルを創ろうとするこの試みにとても注目している。というのも、プロジェクト代表の家中教授は地域学を創ってきた中心メンバーであり、このプロジェクトが地域学を実地に応用する、組織的な試みでもあるからだ。

「地域学を創る」作業も着実に進展している。たとえば、地域学が実効性をもつことができるように、より一層実践に踏み込んだ著作を出版している。家中茂・藤井正・小野達也・山下博樹編『新版 地域政策入門：地域創造の時代に』（ミネルヴァ書房、2019年）と野田邦弘・小泉元宏・竹内 潔・家中 茂編『アートがひらく地域のこれから—クリエイティビティを生かす社会へ』（ミネルヴァ書房、2019年）の出版である。

『新版 地域政策入門：地域創造の時代に』について少しばかり詳しく紹介すると、地域社会の大きな状況変化に即して旧版『地域政策入門』（2008年）の構成と内容を「超学際的(transdisciplinary)」アプローチの観点から一新している。細分化された専門性と学際を超えて、地域の様々な主体と連携・協働しながら、多様で多面的な関わりを統合的・包括的に組み合わせて、新たな地域価値の創造に結びつけるアプローチである。同書の特徴を具体的に示すと、地域社会の現状把握に必要な基礎的な事項と、今後の地域社会を構想する手がかりとなる地域政策の動向や地域創造の展望を簡潔に説明していること、「関連項目」を示して各項目の関係をわかりやすく提示しつつ、超学際的な展開に向けて学問領域の境界を乗り越えようとしていること、そうして読者が地域を構成する様々な領域にわたる知識を使いこなし、超学際的な活動の展開を可能にしていることである（序「地域創造の視座」を参照）。

『アートがひらく地域のこれから』は、自然や他者と関係を結びつつ、一人ひとりが自由に創造性を

発揮して生きられる社会の実現を目指して、地域の多様な人々の暮らしや活動のなかに在るクリエイティビティ（創造性）に着目している。理論的な研究と具体的な事例研究とを組み合わせ、普段見えにくい生や関係性、暮らしのための様々な工夫と技法に注意深く目を向けることで、新たな生や地域の在り方の想像・構築を可能にする展望を切り開いている（「はしがき 生のための戦術と技法」参照）。

以上の短い紹介からも、「地域学のフィロソフィ」が両書を買っていることがお分かりになるだろう。さらに、「知の実践性」への深化を確認することもできる。

次の2つの文化庁事業にも注目したい。「文化芸術による社会的包摂の在り方に関する研究」（平成29年～令和元年度）と「大学における文化芸術推進事業：地域資源を顕在化させるアートマネジメント人材育成事業」である。ともに取組対象を絞り込んで、地域の具体的な課題にしっかりコミットしようとしている。

1つ目の「文化芸術による社会的包摂の在り方に関する研究」では、障害者が文化芸術を介して他者と様々な関係を結んで自己肯定感をもちつつ、より良い生を生きること（社会的包摂）を目指した試みを調査して、**well-being** の核心とそれを支えるものを確認しながら、**well-being** を実現する包摂型社会への道筋を現実のなかに探っている。具体的には、実践者や研究者との議論（シンポジウム）、全国各地の先駆的事例の調査（生活介護事業所「アトリエ コーナス」など）、全国的な状況や動向の把握（「アールブリュット推進センターGently」など）、海外の先駆的事例調査（イタリアの「アルテ・エ・サルデー劇団」など）で、海外を含めて実態調査を行って、理論と実践の両面から課題に迫っている。

2つ目の「大学における文化芸術推進事業：地域資源を顕在化させるアートマネジメント人材育成事業」の場合は、地域に眠っている資源を発掘しその価値を顕在化させつつ、地域の現代的課題に対応した文化的事業を企画運営できるマネジメント・スキル（思考・知識・実践力）の獲得を目指している。そのために理論的学習と現場での実践学習（文化施設や文化活動団体などとの協働）を重視した養成プログラムを構築しようとしている。

以上の3プロジェクトはいずれもまだ終了していないので、成果が公表されるまでには時間を要するが、こうした研究活動の成果を論理化して地域学に組み込めば、地域学の輪郭と内実をより鮮明にできるはずである。

ほかにも重要な研究活動はたくさんある。一例を挙げれば、2011年度以来、地域学部教員と兵庫県立村岡高等学校（地域志向の教育課程を有する地域系高校）との間で行われてきた持続可能な地域社会の創造に資する教育実践においても、地域学を深化させるような研究成果がある。詳しくは、武田信吾、筒井一伸、関耕二ほか、2017、「地域創造に関わる高大連携事業の実践—兵庫県村岡高等学校と鳥取大学地域学部の連携事業をもとに—」（『地域学論集』第14巻 第1号）と、アレクサンダー・ギンナン、2018、「批判的地域主義と地域学の可能性—兵庫県北部における交流と交渉の地域調査」（『待兼山論叢』第52号、大阪大学文学会）をご覧いただきたい。前者の論文では、生徒との協働を通して地域学部の有する専門知が多様なフェーズで参画可能であることを確認している。後者の論文は、ローカルな地域の現在とそれを越えた時空間との間にある多様な関係を確認することで、地域の暮らしの重層性・複合性と「ローカル」から「グローバル」へとまなざしが広がっていく道筋を明らかにした。

地域学部教員の研究活動は本稿ではとても紹介しきれないほど多岐にわたっている。地域学の観点から俯瞰すると、地域学を構成する諸領域・問題群を掘り下げて、全体として地域学に欠けている部分を少しずつ埋めつつあるように思われる。地域学部の地域学研究が地域や社会に今まで以上に貢献するには、研究活動の全体像を把握しながら、様々な知をつないで具体的な課題に挑むこと、さらに格闘の成果を絶えず地域学に組み込んでいくことが必要であろう。この点については、稿を改めて筆者の最後の仕事にしたい。

地域学部は、元々は教育学部であった。それが教育地域科学部になり、地域学部となった。地域学部はさらに改組されて現在に至っている。20年間に実に目まぐるしい変化である。筆者はそのすべてを経験したが、率直に言ってとにかく大変であった。組織づくりの苦労があるのは当然であるが、研究教育の面でも適応に困難があった。

「地域学を創る」ことは、「地域学の確立と普及」という学部目的に照らしても、社会や地域の状況変化を見ても必要なことである。しかし、地域学部は様々な研究領域の専門家集団である。地域学に近い研究をしている教員もあれば、極めて遠い者もある。地域学部では誰もが自己のディシプリンを超えて発想することが求められるとしても、この距離の違いを認めて、それぞれのディシプリンを尊重することが大前提である。教員は本来の研究をベースにして、

そこからどうすれば地域学に貢献できるのかを考えればいいのではないだろうか。それが難しい場合は、地域学を創ろうと努力する教員を応援していただきたい。

地域学部創設のときから地域学を創ってきた教員は定年退職などでほとんどいなくなった。思い返せば、時に励ましを受け、時に孤立した。喜びも苦しみもあった。このような経験をして、現在の学部の研究教育を概観すると、多くの教員の奮闘ぶりに感動を覚える。何を語ればいいのか、何をすべきなのか、さえわからない状況から始めて、ついにここまで来たのか、と思う。「地域学を書く」という筆者の役割はようやく終わった。地域学は次の段階に進もうとしている。

注

- 森まゆみ「小さな雑誌でまちづくり—谷根千の冒険」、「地域学総説」での講演（2010年7月14日）。柳原邦光、2010、『『地域学総説』の挑戦5』（『地域学論集』第7巻第2号参照）。
- 新妻弘明（東北大学名誉教授）「地域とエネルギーから現代文明を問い直す—震災を体験して—」、「地域学総説」での講演（2012年6月20日）。詳しくは、柳原邦光、2017、「地域学講義」（『地域学論集』第14巻第1号参照）。
- 内山節、2011、『文明の災禍』新潮社、144–145頁。
- 宇野重規、2010、『〈わたし〉時代のデモクラシー』岩波書店、iv–vi頁。
- 内山節、2015、『半市場経済—成長だけでない「共創社会」の時代』KADOKAWA、13–20頁。
- 宇野重規、2009、「社会科学において希望を語るとは社会と個人の新たな結節点」、東大社研・玄田有史・宇野重規編『希望を語るとは 社会科学の新たな地平へ』東京大学出版会、273–276頁。
- 加藤晴久、2014、「連載・『ル・モンド』紙から世界を読む131–1067」、『機』（藤原書店）263、20頁参照。
- 『地域学入門』22–23頁。「里山保全」という自然保護運動が始まるのも1980年代である。宮内泰介、2017、『歩く、見る、聞く 人びとの自然再生』岩波書店、31–32頁。
- 柳原邦光、2019、「地域学講義」（『地域学論集』第14巻第1号）。
- Albert Mathiez, *Les origines des cultes révolutionnaires (1789-1792)*, Paris, 1904. アルベール・マチエ（杉本隆司訳）、2012、『革命宗教の起源』白水社。
- E・デュルケーム「宗教現象の定義」、小関藤一郎編・訳、『デュルケーム宗教社会学論集』、行路社、1983年。

- 12 「芹沢光治良氏に聞く エクリバン（作家）としての自由人としての道＝創作生活五十年を記念して＝」、『国文学解釈と鑑賞 芹沢光治良 世界に発信する福音としての文学』至文堂、2006 年、20 頁。
- 13 二宮宏之、2007、「参照系としてのからだとところ—歴史人類学試論—」『フランス アンシャン・レジーム論—社会的結合・権力秩序・叛乱—』岩波書店、177、184、192 頁。
- 14 フェルナン・ブローデル、1995、『歴史入門』太田出版、18 - 19 頁。
- 15 Suzanne Desan, *Reclaiming the Sacred: Lay Religion and Popular Politics in Revolutionary France*, New York, 1990.
- 16 Ralph Gibson, *A Social History of French Catholicism, 1789-1914*, London and New York, 1989, p. 18.
- 17 柳原邦光、1997、「フランス革命と長期的持続—聖職者リクルートと宣誓問題を通して—」、岡本明編著『支配の文化史』、ミネルヴァ書房。

